

山口県宇部市における通学合宿によるまちづくり

大田, 典之
宇部市教育委員会生涯学習課

<https://doi.org/10.15017/9065>

出版情報：生活体験学習研究. 5, pp.81-88, 2005-01-28. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

〔特別寄稿・自治体の取り組み紹介〕

山口県宇部市における通学合宿によるまちづくり

大田 典之

About Tugaku Gasshuku in Ube City, Yamaguchi Prefecture

Ota Noriyuki

本市の生涯学習推進への取り組みは、比較的遅く、平成2年度から検討をはじめ、翌年に「生涯学習市民意識調査」を実施した。調査目的は「生涯学習の主体者である市民像」を探ることで、学習基盤である地域の現状を明らかにし地域の課題を捉えることであった。従来の均一的・画一的な行政スタイルでは、単純な課題には対応できるが、見えない課題や複合的な課題には対応しきれない。地域を分析することで「人の発見」や「地域の発見」へとつながり、給配食サービスや図書館における点訳活動、独居老人宅への訪問などの様々なボランティア活動が、それらの課題を解決する糸口になり得るものと思われる。

平成4年に国の生涯学習審議会が答申した「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」の中で、重点を置いて取り組むべき具体的な課題として、次の4点をあげている。

- ① 社会人を対象としたリカレント教育の推進
- ② ボランティア活動の支援・推進
- ③ 青少年の学校外活動の充実
- ④ 現代的課題に関する学習機会の充実

特に、②と③については、国が生涯学習の推進において「地域」と「そこで生活する人」にはじめて視点をあてている。また、平成8年の同審議会の答申「地域における生涯学習機会の充実方策について」では、

地域づくりや人々の連帯、地域社会への貢献などを、さらに具体的な課題として提示している。

本市の生涯学習推進構想策定までの作業手順としては、生涯学習アドバイザーをお願いしている九州大学大学院教授南里悦史氏、日本社会事業大学教授大橋謙策氏の助言・指導をいただきながら、平成5年には生涯学習推進協議会、生涯学習推進本部、生涯学習推進委員会を設置するとともに、地域課題と特色ある活動を求めて、前記、市民意識調査等から課題へアプローチした。具体的には、前記生涯学習推進協議会・推進委員会のメンバーにより、「高齢化」「青少年の健全育成」「学習環境」の課題別に分科会を設置し、各課題を切り口に、生涯学習推進のための検討課題を明確化するとともに、ビジョンを審議し、これに対する施策を討議した。平成6年には、この分科会で検討された審議事項をまとめ、生涯学習推進のための具体的方策の検討を行い、行政の整備すべき条件、市民や民間が行うべき事項などを、それぞれの視点で審議した。次に、生涯学習推進構想のシンボリックな3つの柱を選定し、「ふれあい市民大学“うべ”」「楽習の森“うべ”」「イキイキ地域づくり」の分科会を再編成し、各分科会でその具体的な内容について検討し、構想の素案を作成した。平成7年3月には、宇部市生涯学習推進構想「きらめきプラン21」を策定し、現在、第二次生涯学習推

連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

宇部市教育委員会生涯学習課 (〒755-0026 山口県宇部市松山町一丁目12番1号 宇部市勤労青少年会館内)
TEL 0836-31-5515

進計画のもとで、その具現化及び生涯学習のまちづくりに向け努力しているところである。ふれあい市民大学“うべ”については、組織的、体系的な学習機会の提供であり、従来の自己完結型の学習を包含したものである。なお、学習の場としては、センター部門、サテライト部門、オープンカレッジ部門の3つに分類される。また、楽習の森“うべ”は、主に青少年を地域で豊かに育むための学校以外での学習などの場の提供である。最後に、イキイキ地域づくりは、学習成果を社会還元するための場の提供や地域課題を解決するための組織づくりなどの仕組みづくりである。

本市においても、当時から子どもたちの様々な体験不足が健全育成にとって大きなマイナスになっていることを認識していたため、庄内町の生活体験学校を参考にしながら事業を実施していきたいと考えていた。構想の策定後、地域住民をはじめとする関係者のご協力のもと、いろいろな事業を実施し、大きな成果を上げていたが、楽習の森“うべ”の子ども体験学習だけは、これまで取り組みができていなかった。このたび、見初、琴芝両校区の住民の協力のもと、ようやく第一歩を踏み出すことができた。通学合宿は子どもの生活体験学習の一つの方法であるが、言い方を変えれば苦勞体験、不自由体験、失敗体験学習でもあると考えられる。また、地域の子どもの中心に、大人がどのように関わるかという地域づくりの側面もある。

これまで生涯学習推進大会は生涯学習のまちづくりについての啓発活動の一環として、ボランティアグループなどの活動内容を紹介するパネル展も合わせて開催していた。今年度は2年ぶりの開催であり、市民にとって具体的で分かりやすい大会とするため、初めて取り組んだ通学合宿の啓発と地域教育力向上のため、大人が地域の子どものいかに関わるかをテーマに開催した。

そこで、平成16年2月29日(日)に宇部市ときわ湖水ホールにおいて、平成15年度宇部市生涯学習推進大会を開催し、東和大学教授の正平辰男先生の基調講演後に行った、パネルディスカッションの討議内容について報告する。

テーマ 「校区における子育て支援のあり方を探る」

- ・コーディネーター 正平辰男(東和大学教授)
- ・パネリスト 井上博己さん

(琴芝っ子わくわく通学合宿実行委員長)

松永祥子さん(通学合宿参加児童保護者)

牧野共明さん(見初っ子通学合宿実行委員会指導部長)

福本富幸さん(見初小学校教諭)

斎藤幸雄さん(宇部市教育次長)

井 上

私は、今回関わるまで、通学合宿という言葉をもっと聞いたことがありませんでしたので、まず各方面から通学合宿についての資料を取り寄せました。そこで通学合宿の趣旨、内容を知り、是非、次世代の子どものために取り組むべきだと考え、社会教育推進委員会を主体として、コミュニティー推進協議会、子ども会、老人クラブなど地域の団体の代表者12名で実行委員会を立ち上げました。

最初に、拠点をどこに置くかという点について考え、最終的に琴芝ふれあいセンターを利用することにしました。ただ、そこは宿泊施設ではありませんので、いろいろと不便な面もあるとは思いましたが、そこは工夫をして乗り切ろうということで決定しました。期間については、9月7日(日)から9月11日(木)までの4泊5日と決めました。(中略)5月に第1回の実行委員会を開催し、小学校の先生を通じて参加児童の募集を行うことになりました。募集人員は12人とし、異学年を対象にするということで、4年生から6年生にかけて各学年4人ずつに設定し、募集した結果、14人の応募がありました。内訳は4年生8人、5年生2人、6年生4人で、性別は男子7人、女子7人となりました。

続いてボランティアの募集に取りかかりました。最初はチラシを作って校区内に配布し、公募するという形をとったのですが、応募者が少なく必要な人数に達しませんでした。これは、こちらの説明不足という面もあったのですが、校区の住民の方に、通学合宿が一体どういうものなのかがよく理解されていなかったことが原因だったようです。その後、校区の各団体を通じて参加をお願いした結果、最終的には53人の方に参加していただけることになり、それぞれ時間帯や役割分担などを決めました。また、ボランティアの中に3

人の高校生がおり、これについては非常に効果がありました。

学校側との協力体制については、実行委員の中に校長先生に入っていたことで、連絡などが大変スムーズにできました。また、学校から「たらい」と「洗濯板」をお借りして洗濯をさせましたが、子どもたちにとって洗濯板を使うのは初めての経験であり、大きな意味があったのではないかと考えております。

啓発活動については、こちらは校区住民にチラシを配るとともに、広報誌「琴芝だより」に通学合宿の趣旨などを掲載いたしました。

期間中の食事については、子どもたちにどのようなのを作りたいかを話し合わせ、献立表を作らせました。また、食材の買い出しはすべて校区内にあるスーパーで行っております。

それからふれあいセンターにはお風呂がありませんので、近所の方にもらい風呂をお願いしたところ、たいへん快くお引き受けいただきました。これがまた、非常によかったと考えております。お風呂を提供していただいた高齢者の方も、自分の孫の面倒はみたことがあるが、よそ様のお子さんを預かったことはないということで、風呂上がりにジュースやお菓子を出しながら、子どもたちといろいろな話をされたようです。各世帯には、こういうことはしていただかないようにと事前をお願いはしていましたが、やはり高齢者の世帯ということで、子どもたちをもてなしてやりたいというお気持ちがあったのではないかと考えます。

成果としましては、児童から見ますと、自立を促すことができた、自分の有用感に気づくようになった、思いやりやいたわりの心を持つようになった、という点が挙げられます。また、異学年ということで、上級生は下級生の面倒を見て、下級生は上級生を慕うなど、非常に意味があったのではないかと考えます。そして校区住民からは、地域の子育てに関わることができたという喜びの声も聞かれました。

今後、次世代の子どもたちをいかに育てていくかという点においては、できるだけ直接体験、つまり大人が手出しをするのではなく、子どもたち自身で身の回りのことをすべてするというのを、少しずつでもやらせる方向で持っていきたいと考えております。

松 永

私は、3つの観点からお話をしたいと思います。

まず1つ目は遊びから見た観点です。我が家には、小学校6年の娘と今回通学合宿に参加した小学校4年の息子がおり、2人ともテレビゲームが大好きで、1日30分以内という約束がありますが、その30分を目一杯満喫していました。通学合宿のチラシが来たときに、息子はすぐに「行きたい」と言って飛びついたので、チラシを全部読むと、“合宿にはゲームを持って行ってはいけない”という決まりがあるのを見て、少し躊躇しました。他にも親と会えないなどの禁止事項がありましたが、そちらの方は自分の中でクリアできたようで、ゲームの点だけが引っ掛かっていたようです。結局参加することにはなりましたが、行く当日の朝も「ゲームが今からずっとできん…」と言いながら出かけていきました。

合宿が終わった日、私は子どもが帰ってきたらすぐにゲームをするだろうと思っていたのですが、一向にゲームをしなないので、しばらく様子を見てみると、6年生の姉が先にゲームを始めました。すると息子が姉の側に行き、「お姉ちゃん、ゲーム楽しい？ゲームより楽しいことがあるんよ」と話し始め、合宿中の夜に友だちとたくさん話をしたこと、外で遊んだこと、ボランティアの高校生と話したこと、地域のおじいちゃんと碁をして遊んだことなどが、とても楽しかったのでゲームがなくても苦しくなかったと話していました。ひょっとして、このままゲームをしなくなるかなと期待しましたが、さすがにそこまではいかず、今でもゲームはしています。それでも、1日30分という約束は守るし、まったくしない日も少しずつ増えてきています。また、本人に何が変わったかと聞くと、「テレビをあまり見なくなった」と言うように、以前に比べてテレビを見る時間が短くなりました。小さな変化と思われるかもしれませんが、我が家にとっては、かなり大きな変化だったように思います。

2つ目は、働くという点です。今までも家で手伝いはさせていましたが、あくまでも手伝いの域で、家族としての仕事の一つという感じではありませんでした。しかし、合宿中のビデオを見ると、食事作りや洗濯、掃除など、お世辞にも上手いという感じではないにしろ、今の学年なりにこなしていたように思いました。また、包丁やコンロを扱う様子も、初日は恐る恐ると

いう感じだったのが、2日、3日と経っていくうちに表情に余裕が見えるようになってきました。このビデオを見て、自分は今まで子どもにできることをさせてなかったと強く感じました。フルタイムで働いているので、家事は自分できつと済ませるほうが、質的にも時間的にも都合がよく、子どもにはほんの少し手伝わせることしかしていなかったと反省し、これから子どもにできることは、どんどんやらせていかないといけないと感じました。また、子どもは、自分がいかに多くのことをしてもらって生活できていたかということ、例えばご飯も作ってもらっていた、洗濯もしてもらっていたということを感じたようです。ただ、そうは言っても生活が一変するわけではなく、食事の用意も私がしていますが、今では「手伝いなさい」と言う前に、自分から近くにきて配膳の手伝いをしたり、「ありがとう」という言葉を自然に言ってくれるようになりました。これも、子どものちょっとした変化かなと思っています。

3つ目がいちばんアピールしたいことですが、人とのふれあいの大切さという観点です。子どもたちは合宿を通していろいろな世代の方と触れ合って、人と触れ合うことの心地よさを感じてきたようです。琴芝の通学合宿は、4年から6年の異学年の班でしたので、違う学年の子どもたちと教わったり教えたりする中で、やはり5年生や6年生はすごいという思いを強く抱くとともに、期間中地域の方々にお風呂を貸してもらったり、夜一緒に泊まってもらったり、食事作りの指導をしてもらったりする中で、たくさんの方が自分たちのことを見て、支えてくれていると感じていたようです。中でもボランティアのおじいちゃんと遊んだことが息子にとって一番の思い出だったようで、祖父を2人とも亡くしていますので、本当にいい時間を過ごさせていただいたと思います。

また、本人は来年も参加したいと言っており、高校生ボランティアを見て、「自分も高校生になったらあの人たちのように小学生の面倒をみたい」とも話していました。「あの人のようになりたい」という人を身近に見つけられたことは、子どもにとって大変貴重な体験だったのではないかと思います。また、私自身も、校区の中にこんなにたくさん子どもを支えてくださる方がいるということを知って、とても嬉しく思うとともに

に、普段仕事に追われて地域のことが見えていなかったことがわかるなど、自分を見つめ直すいい機会になりました。

この様にいろいろな世代が同じ体験を共有するというのは、とても有意義なことであり、通学合宿のおかげで子どもは勿論、親や地域の人とともに成長できたことはとても素晴らしいことだと感じました。今回、自立の種をまいていただいたと思っていますので、今後、親として、せっかくまいた種を枯らすことがないように、できることはやらせ、教えていないことは教え、しっかりした大人になってもらうように育てていきたいと思います。子どもたちが自立していくことが、今回の通学合宿を支えてくださった方々への一番の恩返しになると思っています。

牧野

参加者は6年生に限定し、定員は設けませんでした。これは見初小学校には、各学年1クラスということで、クラス全員が参加しても運営に問題がないということに加え、6年生にリーダーシップをとれるような力を身につけさせたいというねらいがありました。最終的には27人中26人が参加し、そのうち期間内に応募したのが22人でした。ただ、この時に気を使ったのが参加しない子どものことで、「なぜ参加しないのか」と言うのではなく、参加しない自由もあるということはどう広め、保護者に徹底していくかを考え、事前にクラスの役員の方に集まっていたいて趣旨説明を行いました。(中略)それと、期限を過ぎての申し込みについては、やはり子どもですから感情が揺れ、決断するのに時間がかかってしまい、期限を過ぎて参加を決めた子どもをどうするかということがありましたが、これについては実行委員会の中で話し合い、最終的に参加させることにしました。

期日は夏休み直前の、7月16日(火)から7月19日(金)までに設定しました。

このような行事を行う場合、行事の後、子どもたちが校区とどう関わるかを見て、行事の評価をしていくことが必要だと考えています。見初の場合、今回の通学合宿を契機に子どもたちが、今まで以上に地域の行事に参加するようになりました。特に子どもたちが、ここは私たちの地域であり、私たちもこの行事に参加していいんだ、という思いを持ったように感じられま

す。例えば、合宿の後にあった校区の盆踊りでは、真っ先に踊り始めたのは子どもたちで、大人が後からついていくという感じでした。見初校区は高齢化が進んでいることもあり、その光景を見て「子どもがいるのはいいね」という言葉があちこちで聞かれました。また、子どもが来れば親もついてくるということで若い人たちも増え、少しずつ地域が活性化しているように思います。

また、私はこうした行事に取り組むうえで大切なことは、子どもに決定権を与えてやることだと考えています。今回の通学合宿についても、スケジュール、プログラム、食事内容など生活に関わるすべてのことを子どもたちに決めさせ、子どもたちは、自分たちで決めたことを淡々とこなしていました。勿論、そのようになるまでには様々な苦勞もありました。しかし、子どもは自分たちで決めたことについては、すごい力を発揮するので、“寝ない”こと以外は、大人が何も言わずにプログラムが進行されていきました。極端に言えば、いつのまにか起きて、朝食を作って食べ、気がついたら学校へ行っていた、という感じです。それは、子どもに「自分たちで決めたことだからやらなくてはいけない」という思いがあったからだろうと思います。

勿論、こうしたことができるのは、地域の方やセンターをはじめとする行政サイドの全面的なバックアップがあったからに他なりません。

福 本

(前略) 4月になって6年生の担任をすることになり、私もできることは協力しようということで、まず実行委員会に参加しました。また、実行委員会から保護者あてに参加者募集のプリントが配られましたが、牧野さんをはじめとする実行委員の方から、プリントだけでは趣旨が十分伝わらない可能性があるというお話がありましたので、私が出している学級だよりでも参加を呼びかけました。ただ、強制ではなく自由参加であるということも理解していただけるように、できるだけ分かりやすい表現にして配布しました。通学合宿を知った時の児童の反応は、修学旅行やふれあいキャンプに加えて、また一つ楽しみが増えたという感じでした。

参加しない子どもについても、クラスの中で孤立したり、その子の立場が危うくなるようなことがあって

はいけないということを十分に考えていただきました。その中でいくつかドラマもありました。クラスに知的障害があり、ほとんどコミュニケーションがとれない子がいるのですが、他の子どもたちはその子どもも当然参加するという考えを持っていました。保護者も4日間も家を離れるということに不安があったようですが、子どもたちの支えもあって、見事に最後まで参加することができました。

期限を過ぎて参加を希望するケースもありました。1人はグループ分けの日に希望してきたので、実行委員の方をお願いして認めていただきました。別の3人は合宿が始まってから、他の子どもの楽しそうな様子を見て参加したくなったようで、こちらも急遽実行委員の方をお願いし、保護者に連絡をとるなどして、2日目から参加しました。クラスの1人の子は最初から参加しないということでしたが、参加しないことによって孤立したり不当な扱いを受けたりすることもなく、その後もクラスの中で普通に生活できています。こうしたことに関しては、子どものことを非常に大切に考えてくださった実行委員の方と子どもたちにとっても感謝しています。

また、私のもう1つ役割は、遠足気分楽しんでいる子どもたちに、見えないところで支えてくれている人たちがいるということを話してあげることでした。例えば牧野さんが、期間中ずっと玄関の廊下で寝てくださったことや、子どもたちの希望でやったおぼけ屋敷で、蒸し暑い中、衣装やお面などを用意して協力してくださった地域の方々のことなどについて説明し、「自分たちが楽しめたのは地域の人たちが支えてくれたおかげであることを忘れてはいけない」という話をしました。卒業文集では、何人かの子どもが通学合宿の思い出について書いていましたが、その中に地域の方に対する感謝の気持ちを書いており、子どもたちもよく分かってくれたのだと思います。

正 平

まず琴芝のほうから、最初の説明にはなかった子どもに関する状況をお話していただきたいと思います。

井 上

1、2、3年生は無理だろうと考え、4年生以上に決めました。また、意識的に異学年にしたのは、現代社会においては横のつながりに比べ、縦のつながりが

大人も含めて希薄になっていますので、この縦の関係を大事にすることを教えようというねらいがありました。これは、結果として成功だったと思います。また6年生は、下級生に人気のある子どもとそうでない子どもがいましたが、やはり言葉と行動がともなう子どものほうが下級生に慕われていたようです。

正 平

よくわかります。今の子どもは6年生だからということで班長をやらせても、行動し始めると5年生のほうがはるかに優れていて統率力があるということもめずらしいことではありません。

それでは、松永さんから子どもに関わる状況で、補足のご発言があればお願いします。

松 永

今朝気がついたことをお話します。我が家でも子どもが小さいときから手伝いをさせていました。私が働いているため家事は手短かに済ませたいという思いがありますので、例えば洗濯物が裏返っていたら洗わないということを幼稚園の頃からしつけていましたが、なかなかできないのが現状でした。今朝も6年生の娘の服が裏返っていましたので叱ったのですが、その時に4年生の息子には、通学合宿に参加してから、洗濯物が裏返っているということがまったくなくなったということに気づきました。通学合宿の前は、息子のほうが服を裏返しに脱いでいることが多く、何度言い聞かせてもほとんど改善されなかったのですが、今朝の出来事を通して通学合宿でのほんの数日間の体験が生きたことを改めて実感しました。

正 平

ところで見初めの方は、子どものリーダー性を高めていこうということで6年生に限定されたとおっしゃっていましたが、もう少し詳しくそのねらいについてお話しして下さい。

牧 野

一つはふれあいキャンプと関係があります。キャンプは、これまでも6年生が中心になってプログラムや内容をすべて決めていますが、なかなか話し合いを持つ時間がとれないため、なんとかならないかという思いをスタッフ一同持っていました。そこへ通学合宿の話がきましたので、「せっかくならこの期間にそれをやろう」ということになり、通学合宿の期間中、午後

1コマはふれあいキャンプの打ち合わせに時間をとらせてもらいました。

もう一つは、最近なかなか子どもが育たないといわれる原因の一つとして、「自分がこういう人間になりたい」という少し先の姿が見えないというものがあると考え、「6年生になったらこういうことができる」という少し先のことを地域の中にもあらわしていくということが大切だと思っていました。

こういったことを含めて総合的に判断した結果、今回は6年生に限定するということになりました。

福 本

成果と言えるか分かりませんが、通学合宿で食事を作る際、みんながある子どもの手際の良さを見て驚いていました。その子どもは、それまでもクラスの中に居場所がないということはありませんでしたが、今回の通学合宿をきっかけに、今まで以上にその子どもへの見方が高まったように感じます。また、学校で何かのグループを決める時も、これまでくじで決めていたこともあったのですが、通学合宿の後にはクラス全員の話し合いでスムーズに決められるようになってきています。

正 平

さて、もう1つの課題である「地域の大人の人間関係」についてですが、琴芝の場合は高校生がボランティアとしてバックアップしてくれたという報告もありました。そこで、今回の通学合宿における大人のつながりの状況について、もう少し詳しくご報告して下さい。

井 上

琴芝ではふれあいセンターのロビーをボランティアの控え室にしましたが、これは、人の出入りのチェックができるということと、コミュニケーションが図れるという点を考慮しました。期間中は校区の団体の方や高校生などたくさんの方のボランティアが参加し、このロビーで通学合宿以外のことも多く話されていました。特に正式な会議の席では出ないような井戸端会議のような話題によって、より一層コミュニケーションを深めることができたという点で、大変意義があったのではないかと思います。

正 平

見初め校区の場合は、ふれあいキャンプと通学合宿で大人の支援体制に違いはありましたか。あったとすれ

ば大人同士の交流は広がったと思いますか。

牧野

見初の場合、以前から地域の大人の結びつきができていますので、特に大きな変化はありません。ただ、通学合宿のほうがキャンプよりも支援体制が大きかったということで、交流が広がったということは確かに言えると思います。

正平

それでは行政のほうから、今回2つの校区で初めて通学合宿に取り組んでいただいて、今後、他の校区にどのように呼びかけをし、支援していこうとお考えですか。

斎藤

これまで何度か打ち合わせをしてきた中で出た課題として保険の問題などがありました。これらについても、今後検討し、場合によっては対応策を考え、地域でやっていただけることと行政でやっていくことなどを整理しながら、新しく取り組まれる校区の方にも情報として提供していきたいと考えています。

質問者

生涯学習の一番の目的とは何ですか。

それと、今回のテーマは通学合宿における子育て支援ということですが、資料を読んだり、パネラーのみなさんの話を聞いたりして十分理解できました。私としては今の子どもたちの生活体験が不足しているの、社会あるいは校区全体でしっかり育てていくことが必要だという感じを受けました。

正平

それでは最後に、私のほうからまとめた話をさせていただきます。

今日の登壇者のご発言で感じたことは、琴芝にしても見初にしても、それぞれ地域で培ってこられた人と人とのつながりという財産をお持ちで、その財産を土台にして、やったことのない通学合宿を実施されているということです。しかも、その財産がしっかりしているため、新しく取り組まれたにはは相当程度の成果を上げられ、さらに、その新しい取り組みにチャレンジされたことで、今まであった地域の人々とのつながりが一層厚みを増し、信頼感を深める方向に進んでいると実感しました。

松永さんのご発言の中に子どもがゲームよりも楽し

いことがあるのに気づき、その後テレビを観る時間が減ってきたという話がありました。この通学合宿というプログラムは、子どもが家庭や地域で体験できる様々な事柄を体験していないから、その場面を設定して体験させていこうというものですが、もう1つ重要な問題があります。それは、子どもの中に既に存在している一定量の体験のうち、過剰に増えてしまった体験を削ぎ落とすということです。過剰な体験を減らしていく努力をしながら、一方で欠けている体験を補完していくという両方の営みが、同時並行的に加減よく行われることで、子どもの好ましい変容が出てくるのです。

次に、松永さんが、「子どもにできることはどんどんやらせていかなくはいけないということに気づいた」と話されていましたが、是非それも生活レベルの中で実行していただきたいということです。

日本でもこれからは、小学校までに必要なことをきっちりと教え、思春期に入ったら適度な間合いをとり、つかず離れずの関係を保ちながら育てていくようなやり方に変えていく必要があるのではないのでしょうか。

子どもたちは通学合宿での地域の大人とのふれあいを通じて、自分が大きくなったらこういう大人になりたいという「憧れの大人モデル」に出会ったのではないかと思います。親の場合、自分の悪い部分がよくわかっているため、子どもに対して「自分のような大人になれ」ということは、なかなか言いにくいものです。では、そのモデルはどこにあるかという、やはり地域にあるのです。ですから、子ども自身に「こんな大人になりたい」と思わせるためには、子どもの背中を押して地域の人との交流ができる場所へ送り出し、人とのふれあいの体験を豊かにしていくことが必要で、その1つの方法が通学合宿なのだと思います。

最後に、家庭で子どもにさせる体験は、それぞれの家庭ごとに違う個別体験学習です。その対極にあるのが学校での体験学習で、これは全員が同じ体験をする一斉体験学習です。そして、社会教育では参加しない人がいることを前提にした「この指とまれ」方式の自主参加での体験学習です。この3つは、子どもに力をつけさせるためにそれぞれが相互に影響しあう関連性のあるものです。よって、学校の先生は、家庭や社会

教育で子どもにどのような体験をさせているかをしっかり見る目と関心を持っていなければ、自分の学校の子どもが抱えている問題の解決ができません。

これから先、家庭・学校・社会教育・地域それぞれが、縄張り意識や安直な縦割り主義を捨て、相互の信頼関係をどう回復していくかということが、今問われている極めて重要な課題なのです。

まとめ

「通学合宿を通して、子どもたちは勿論、私たちも成長できた」との感想が聞かれ、親やボランティアとして協力された大人にとっても、住民同士の交流や、協調性を育む機会となり、地域での人間関係が一層深まるなどの効果があったとの報告を得ている。

また、子どもは、自力での生活や共同生活を通じて、様々な混乱や困難に直面したが、自分自身で考え行動し、友だちと協力しながら乗り越えていく中で、達成感を実感するとともに、地域の大人や参加者同士の人間関係を深めることに喜びを感じることができた。小学校長の実行委員会への参画や、担任の先生による参加・不参加児童への配慮などは、地域にとっても、子どもたちにとっても、とても心強い支えであった。

今後、子どもの発達にとって必要な取り組みを、さらに進めていくためには、ふれあいセンターが中心となり、学校と地域の関係性を深め、互いに強力に連携しあうことが重要である。

しかしながら、限られた期間実施する通学合宿だけで、その後の子どもの生活が急に変わるわけではない。各家庭でも、子どもの自立や自律の芽を枯らすことなく、家族の一員として役割を果たせるよう、家庭でできる体験は時間や手間をかけてでも、やらせてみるなどの取り組みが必要であると考え。そのためには、子育て講座や家庭教育学級などでの啓発とともに、通学合宿や校区子ども委員会事業などの充実が必要である。

生涯学習推進大会は、隔年開催であることも考慮し、今後とも、市民に分かりやすく具体的なテーマを設け、推進構想の啓発も可能な内容にしていくことにする。今後も、「楽習の森“うべ”」の取り組みである各事業の実施内容について、学校、地域、行政が連携し課題の解決ができるよう、以下の視点の充実を図っていく。

- ①青少年の学校外での生活体験の場
- ②グループ・サークル活動などの場
- ③地域活動リーダー養成・活動の場
- ④地域おこしの拠点・世代交流の場

「イキイキ地域づくり」の取り組みとして、事業実施の中で地域課題を解決し、豊かな地域づくりを実現するために、ネットワークづくり、組織づくりなどをふれあいセンターを拠点として行う。現時点ではコミュニティ組織や各種団体の関係性が、地域によってまちまちで解決しなければならない課題はかなり多い現状があるが、事業終了後にも主体的な地域づくりが継続的に推進できるように、地域づくり計画の策定なども含め、そのしくみづくりを行っていく。

「ふれあい市民大学“うべ”」でのセンター部門のシルバークレッジに関しては、学部制や運営方法などについて見直したうえで充実していく。サテライト部門である、ふれあいセンターの成人学級などについては、講座自体の実施形態などを見直し、住民の自主性・自立性が養えるよう充実させていく。また、オープンカレッジ部門については、宇部フロンティア大学や山口大学などの高等教育機関とより一層連携・協力していく。特に、宇部フロンティア大学については、協定書の内容に沿って推進構想の生涯学習センター事務局などに関しても協力していく。

生涯学習推進構想の3つの柱は、市民との協働による豊かな生涯学習のまちづくりを実現するために、それぞれがうまく機能していく必要があるが、互いにリンクしあいながら有機的にネットワークする必要もある。また、第二次生涯学習推進計画は平成17年度までのため、次期計画を策定する必要があるが、推進構想についても現状に合致しない部分については見直しも必要である。いずれにしても、生涯学習推進構想の策定時の基本理念に立ち返り、地域に住む市民を中心に理想の姿を話し合い、自分たちが住む地域の特色あるまちづくりを進めていけるよう、地域住民の力量を高めることが最大の目標である。この目標に向かって、学校を含む行政と地域住民がこれまで以上に手を携えて協力していくことが最も重要である。

※なお、このシンポジウムは、宇部市教育委員会生涯学習課によって認められています。